勝負服

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勝負服

【Ｎコード】
Ｎ５９３７Ｕ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ベトナムの女子大生。その勝負服はというと。ベトナムの女の人は美人さんが多いです。

第一章

勝負服

ホー＝チミンは今日も暑い。その暑さの中でだ。
人々は活気に満ちている。誰もが明るい顔で学校に通い働いている。
それはチュオン＝バン＝チンも同じだ。彼女は大学の教室でクラスメイト達とこんな話をしていた。
「最近美味しいお店って何処かしら」
「ああ、麺だったらあそこで」
「御飯だったらあそこ」
「御菓子だったらね」
女の子の話はだ。どの国でも同じだ。皆笑顔で話をしている。
そしてだ。こんな話もするのだった。
「最近チュオン服変えたわね」
一人がチュオンに言ってきた。
「ズボン増えたわね」
「うん、動きやすいからね」
チュオンは微笑んで彼女のその言葉に応えた。チュオンは今は白いブラウスに青いジーンズというラフな格好である。それが黒のロングヘアによく似合っている。切れ長の長い睫毛の目に大きな薄い唇の口、高い鼻は整っている。背は高くすらりとしていてそれがまたジーンズに似合っている。
その彼女がだ。応えてこう言うのだった。
「だから最近はね」
「ズボン多いのね」
「日本とか台湾のファッション勉強してるのよ」
ここでこうも言うのだった。
「それでなの」

「あっ、日本ね」
「それと台湾なのね」
「そうなの。アメリカのファッションもいいけれど」
それでもだというのである。
「やっぱり。同じアジアだしね」
「そうよね。一番参考になるわよね」
「それはね」
「着物とかは流石に無理だけれど」
チュアンは笑って日本のその着物は駄目だというのだった。
「高いしあれって完璧に日本だから」
「だから全然ってことね」
「普通の服ってことね」
「やっぱり」
「そうなのよ。とにかくあれなのよ」
また言うチュアンだった。
「服はね。やっぱり日本とか台湾よね」
「確かにね。韓国もいいけれどね」
「まあ日本が一番いいわね」
「垢抜けてるし」
「参考にするのなら一番ね」
他の娘達もこう話す。そして彼女達はこんなことも言う。
「昔の服なんてねえ」
「もうださいからね」
「着ていられないっての」
「そうそう」
昔の服、ベトナムのかつての服については邪険に否定するのだった。
「もう服があればいいって時代じゃないから」
「これからは我が国もファッションに凝ってかないとね」
「そうしないとね」

「アオザイも古いわよね」
「そうそう、もうアオザイよりもね」
「今の服よ、トップモードよ」
そんな話をするのであった。ベトナムが豊かになってきているのは事実であり彼女達もそれを自覚しながらだ。ファッションを楽しむのだった。
特にチュアンはだった。食べ物も好きだが特に服だった。それに凝っていてお小遣いの殆どをそれに使いアルバイトの金もだった。そんな学生生活を送っていた。
その中でだった。不意にだ。
街を歩いているとだ。ブティックに一人の男を見た。それは。
背が高くはっきりとした顔立ちに黒く大きなはっきりとした目、それにすらりとした身体をしている。服は普通の青いシャツとブラウンのズボンだが着こなしがいいのかよく似合っている。その彼を見てだった。
チュアンは立ち止まってしまった。実は彼女の好みだったのだ。
それでだ。何処となく彼のところに来てだ。こう声をかけるのだった。
「あの」
「はい、何でしょうか」
「ここでお勧めの服は何ですか？」
「お勧めの服ですか」
「はい、それです」
こう彼に問うのだった。
「それは何でしょうか」
「そうですね。それでしたら」
ここでだ。彼はいうのだった。

第二章

「ここは」
「はい、どの服でしょうか」
「これですね」
こう言ってだ。そのうえで出してきたのはだ。それは。
アオザイだった。それを見てだった。
チュアンは顔を顰めさせてだ。こう彼に言うのだった。
「あの、これって」
「アオザイですかれど」
「今時アオザイなんて」
「皆着ていますよ」
「もう古いですよ」
最新の流行を追い求めている彼女にしてみればそうなのだった。
「そんなのって」
「いえいえ、アオザイはですね」
「どうだっていうんですか？」
「とてもいい服です」
こう話すのだった。
「動きやすいですしそれにデザインもいいですし」
「もう古いですよ」
「古くはありませんよ」
まだ言う彼だった。
「だからどうでしょうか」
「別の服を御願いします」
これが彼女の返答だった。
「別の。日本の流行の服をです」
「日本ですか」
「はい、日本です」

チュアンは言い切った。
「やっぱり日本のが一番じゃないですか」
「まあそうですね」
それは店の人間も認めた。
「悪くはないです」
「何かあやふやな返事ですけれど」
「いや、だからですね」
「アオザイがいいっていうんですね」
「本当にどうですか？」
男はこう言って引かない。
「安くしておきますよ」
「安くですか」
「はい、安く」
ベトナムではお互いに値切りをし合って買うことが非常に多い。非常に逞しいベトナム人である。
「それでどうですか？」
「それじゃあですね」
「はい、買われますか？」
「値段によります」
そしてチュアンもベトナム人である。こう言うのであった。
それから激しい値切り合戦を繰り広げてだ。彼女はそのアオザイを買ったのだった。ついでに日本の服を買うことも忘れなかった。
店の男は呆れながら彼女にいった。
「毎度あり」
「はい、有り難うございます」
「しかしお姉さん強いですね」
このことを言うのを忘れなかった。その値切りのことである。
「本当に」
「買い物は慣れていますから」
にこりと笑って返すチュアンだった。

「ですから」
「いや、まだ学生でしょ？」
「大学生です」
「それでその強さは」
「いいですか？」
「いいです。いい奥さんになりますよ」
こんな話もした。何はともあれチュアンはアオザイを買った。その白いアオザイを着て登校してみるとだ。友人達は次々に言うのであった。
「あれっ、アオザイもよくない？」
「そうよね」
「これで結構」
「いいわよね」
評判は中々いいものだった。

第三章

「古い、時代遅れって思ってたけれど」
「それでもね。実際に見てみると」
「いいじゃない」
こうだ。そのチュアンが着ているアオザイを見て言うのだった。
「何かあれ？お城にいるみたいな」
「そこに仕えている女官ね」
「そんな感じよね」
「つまりいいのね」
チュアンもそんな彼女達に対して述べる。
「この服装って」
「ええ、いいと思うわ」
「チュアンがそれ着るなんて以外だったけれど」
「それでもね」
「いいと思うわ」
こうした評価であった。そしてだ。
彼女はそれから時々アオザイを着るようになった。するとだ。
男の子達もだ。彼女を見るようになった。これまで以上にだ。
「何かいいよな」
「ああ、スタイルいいよな」
「すらりとしてるし」
「可愛いよな」
アオザイと共に彼女も注目される。さらにであった。
それでだ。同じ大学の同じ学部のだ。グエン＝バン＝チュンがこう言ってきた。格闘技を得意としていてスポーツマンとして知られている。黒い肌に人懐っこい笑顔がトレードマークの気さくな若者だ。格闘技をしているだけあって引き締まった身体に長身である。黒髪を短く刈り丸い大きな目をしている。

その彼がだ。こうチュアンに声をかけてきたのだ。
「あのさ」
「どうしたの？」
「今度よかったらさ」
そのアオザイ姿の彼女に声をかけてきたのである。こう。
「映画観に行かないかな」
「映画に？」
「そう、映画にね」
こう誘ってきたのだった。
「どうかな、それは」
「映画っていうと」
「そう、今人気のあれね」
ここでその映画のタイトルをチュアンに話すとだ。チュアンは笑顔で応えた。
「あっ、その映画私も」
「観に行きたいって思ってたの？」
「ええ、そうなの」
こう話すのだった。
「それじゃあ一緒にね」
「うん、一緒に行こう」
こうしてだった。デートが決まったのだった。そしてだ。
デートの後でだ。チュアンは友人達に話すのだった。
「それでそれからね」
「付き合うことになったのね」
「そうなのね」
「ええ、そうなのよ」
こう満面の笑みで話すのだった。彼女は今は青いアオザイを着ている。
「私今凄く幸せよ」
「グエン性格いいしね」

「気さくだし優しいし」
「よかったじゃない」
「そうね。やっぱりこれって」
チュアンはだ。ここでこう言った。
「アオザイのお陰ね」
「その服のお陰なの」
「それでグエンをゲットしたって」
「そうなのね」
「ええ、そうよ」
こう話すのだった。
「間違いなくね」
「ううん、アオザイって凄かったのね」
「そうね」
友人達も顔を見合わせて話す。
「これまで何ともないって思ってたのに」
「古くて時代遅れだって」
「そう思ってたけれど」
「違ったんだ」
「そうよ。アオザイって凄いのよ」
チュアンは満面の笑顔で言う。

第四章

「動きやすいし涼しいし」
「着心地もいいんだ」
「そうなのね」
「そうよ。だから皆も着てみたらいいわよ」
洋服の彼女達への言葉だ。
「アオザイもね」
「そうね。それじゃあ私達もね」
「着てみる？」
「そうしてみようか」
こんな話をしてからだった。彼女達もアオザイを買ったり母親の箪笥から出したりして着てみた。するとであった。
彼女達もだ。それぞれ。
「彼氏できたわよ」
「何か男連中の見る目が変わってきた？」
「そうよね、下手な洋服着るよりもね」
「いい感じよね」
「そうでしょ。アオザイ着てると皆見るのよね」
今日もアオザイ姿のチュワンが笑顔で皆に話す。
「これがね」
「ううん、何でかしら」
「皆アオザイそんなに好きなのかしら」
「民族衣装だから？」
女の子のうちの一人が言った。その彼女も皆もだ。今はそれぞれの色のアオザイを着ている。そしてお互いにアオザイを見合いながら話すのだった。
「だからかしら」
「それでかしら」

「ううん、っていうかね」
しかしだった。ここでチュアンは言うのだった。
「これってね」
「アオザイは？」
「どうだっていうの？」
「スタイルがよく出るし」
まずはそれだった。
「それにデザインがいいじゃない」
「それなの？」
「だからなの？」
「いいっていうの？」
「そうじゃないかしら」
こう皆に話すのだった。
「それで男の子にも人気があるんじゃないかしら」
「それでなのかしら」
「スタイルも出てデザインもいい」
「確かにそうだし」
まさにその通りだった。アオザイはそうした服だった。
それは着てみて彼女達もわかることだった。それも実にだ。だからこその言葉だった。
「じゃあこうして着てもなのね」
「いいんだ」
「そうなの」
「でしょうね。私も最近になって気付いたし」
他ならぬチュアン自身もだというのだ。このことをまた言うのだった。
「アオザイって実はそういういい服だったのよ」
「ううん、昔の服ってお洋服の相手にならないって思ったけれど」
「実は違った」
「そうだったのね」

「これが」
「そうなのよね。昔の服だってね」
チュアンは自然と笑っていた。そうなっていた。
それでだ。彼女はあらためてこう皆に話した。
「勝負服になるのよ」
「そうなのね」
「それもかなり強烈なね」
「凄い服になるんだ」
こう話していくのだった。皆でだ。
「アオザイ恐るべしね」
「まさにね」
「これって」
こんな話をしてだった。皆でそのアオザイを見ながらそのよさを実感するのだった。それはチュアンも然りだった。そして彼女はアオザイを着続けるのだった。それは他の皆も同じだった。その勝負服を。

勝負服　完

２０１１・１・２３

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5937u/

勝負服

2011年7月4日03時11分発行